

日 本 家 政 学 会
被 服 構 成 学 部 会 誌

第 32 号

平成 23 年 3 月

目 次

・ 部会長ごあいさつ	1
・ 平成 22 年度 被服構成学部会 総会	3
・ 平成 22 年度 被服構成学部会 夏期セミナー	
プログラム	4
基調講演 1「ファッションにおけるプレゼンテーションのあり方とその意味」	5
基調講演 2「ファッションビジネスにおけるファッションショーの役割」	6
話題提供「パリコレの現場から大学教育の現場へ」	7
パネルディスカッション「大学発のファッションショーの意義」	8
見学「富田染工藝」「永世文庫」	10
夏期セミナーに参加して	11
・ 平成 21 年度研究例会「大学と中・高校の被服製作学習の発展に向けて」	12
大学の現場から ―学生の学びから感じること―	12
高等学校の被服製作学習の現状 ―全国調査の結果から―	13
・ 第 11 回全国中学生創造ものづくり教育フェア報告	14
・ 関連学会短信	
2010 年 ITAA 年次大会	16
日本人間工学会第 51 回大会	17
日本衣服学会	17
・ 会務報告	18
・ 平成 21 年度 被服構成学部会 夏期セミナー収支報告	19
・ 平成 21 年度 被服構成学部会 収支決算報告	20
・ 平成 22 年度 被服構成学部会 予算	21
・ お知らせ	22
・ ご案内	23
・ 被服構成学部会規約	24
・ 平成 22・23 年度役員	27
・ 入会申込書および変更届, 退会届	28

部会長ごあいさつ

(社)日本家政学会被服構成学部会
部会長 布施谷節子（和洋女子大学）

卒業式の余韻が冷めやらないうちに、入学式になってしまうという慌しい学年末をお送りになった方が多いと思います。平成 22 年度も部会員の皆さまのご協力のおかげで、予定の事業を遂行することができました。心よりお礼申し上げます。

日本家政学会は平成 22 年度中に一般社団法人への移行申請が無事に認められ、平成 23 年度からは新たな出発です。これに伴い、昨年は、被服構成学部会でも会則を改正し、総会にて承認いただきました。これからは、部会は学会と常に関係を密にしていくことになると思います。例えば、部会の活動資金を得るために、学会本部に年 2 回事業計画を出して、理事会で承認されると、補助金がもらえることになります。これまでは、独立採算でしたので、夏期セミナーなどの余剰金を活動基金としてまいりました。これからは利益を出すことよりも、部会員にとって有意義な企画をいかに実行に移すかが問われることになると思います。

また、平成 21 年度春の研究例会では、「大学と中・高校の被服製作学習の充実に向けて」というテーマの下、多くの部会員と中・高校の先生方にお集まりいただきました。その中で、製作教材の開発と普及に向けての提案として、中・高校の先生方のご意見をいただきながら、現場の先生方や生徒さんに使っていただけるような被服製作教材を掲載した本を、部会として出版したいという提案をいたしましたところ、多くのご賛同をいただきました。その後の総会でも了解をいただき、昨年の秋から企画委員を中心に準備を進めてきました。教材案を部会員に公募したところ多くの作品案をお寄せいただきましたので、目下、今年の秋の出版を目指して、編集が進められております。これまでの部会員の皆さまの授業や研究の成果が、このような形で、現場のお役に立つのではないかと考えますと、大変うれしく存じます。出来上がりましたら、部会員の皆さまにお送りいたしますので、お知り合いの現場の先生方にもご紹介いただければ幸いです。

今年度の夏期セミナーは、「衣心地の質の向上を目指して一着心地と見心地のトータル化を探りませんか」（予定）と題して、三重大大学で開催いたします。増田智恵実行委員長をはじめ、実行委員の皆様方が、準備を進めてくださっていますので、どうぞご参加ください。

大学では少子化の中で、また、ものづくり離れの中で、被服構成学は厳しい立場にあって、先生方は日々大変なご努力をなさっていることと思います。こんな時こそ、部会員がお互いに手を携えて、前向きな提案をしていくことが大切だと考えます。今後とも、部会員の皆さまのご協力をよろしくお願い申し上げます。

平成 22 年度 被服構成学部会 総会

日時：平成 22 年 5 月 29 日（土）

会場：広島大学 K114 室

平成 22 年度被服構成学部会総会は、鳴海多恵子副部会長の司会により下記のとおり進行した。

総会次第

- | | |
|--------------------------|-------|
| 1. 開会の辞 | 鳴海多恵子 |
| 2. 部会長挨拶 | 布施谷節子 |
| 3. 報告 | |
| (1) 平成 21 年度事業報告 | 森 由紀 |
| (2) その他 | |
| 4. 議長選出 | 服部由美子 |
| 5. 議事 | |
| (1) 平成 21 年度会計報告 | 林 仁美 |
| (2) 平成 21 年度会計監査報告 | 富田 明美 |
| (3) 平成 21 年度夏期セミナー会計報告 | 鈴木 明子 |
| (4) 平成 21 年度夏期セミナー会計監査報告 | 堀尾 茂子 |
| (5) 平成 22 年度予算（案） | 磯崎 明美 |
| (6) 平成 22 年度事業計画（案） | 土肥麻佐子 |
| (7) 被服構成部会規約の件 | 布施谷節子 |
| (8) その他 | |
| 6. 議長解任 | |
| 7. 閉会の辞 | 岡部 和代 |

上記の議事について審議し、承認された。

平成 22 年度被服構成学部会夏期セミナー

「被服構成学的視点からの情報発信 - ファッションショーが果たす役割 - 」

期 日： 2010 年 8 月 23 日（月），24 日（火）

会 場： 日本女子大学新泉山館国際交流センター

プログラム

	8 月 23 日（月）
12:30～	受付開始
13:00～13:05	開会の辞
13:05～14:35	基調講演 1 「ファッションにおけるプレゼンテーションのあり方とその意味」 ーキャットウォークショーから新世代対応へー アツロウ・タヤマ デザイナー 田山 淳朗 氏
14:35～14:55	休憩
14:55～16:25	基調講演 2 「ファッションビジネスにおけるファッションショーの役割」 元西武百貨店バイヤー 増田 泰子 氏
17:00～19:00	懇親会
	8 月 24 日（火）
9:30～10:30	話題提供 「パリコレの現場から大学教育の現場へ」 和洋女子大学 滝澤 愛 氏
10:30～10:40	休憩
10:40～12:10	パネルディスカッション 「大学発のファッションショーの意義」 コーディネータ 日本女子大学 大塚美智子 氏 パネリスト ① 東京家政大学 雲田 直子 氏 ② 相模女子大学 田中 百子 氏 ③ 東京田中短期大学 小田巻淑子 氏 ④ 文化女子大学 磯崎 明美 氏
12:10～12:20	閉会の辞
13:30～16:30	見学 ①富田染工藝 （江戸小紋についての講義と袱紗の染色体験） ②永世文庫（細川家伝来の歴史資料，美術品収蔵）

基調講演1「ファッションにおけるプレゼンテーションのあり方とその意味」

—キャットウォークショーから新世代対応へ—

アツロウ・タヤマ デザイナー 田山 淳朗 氏

1955年熊本に生まれた田山淳朗氏は、高校生のとき、ファッションの道に進むことを希望した。当時カタカナの職業名に憧れたこともあり、文化服装学園に入学した後、ハイファッションのコンテストでピエールカルダン賞を受賞し、デザイナーの道に進まれた。1975年ヨージヤマモト（Y's）に入られてから今日までの自分の歩いて来た道を語られる中で、急速に変わりつつあるプレゼンテーションスタイル—ターゲットの変化とデジタル時代への対応、時代を発信し続ける表現方法の今後の方向性などを織り混ぜて、講演していただいた。

1900年以降始まったといえる現在のファッションは、1950年代のクリスチャンディオールの出現により、オートクチュールが復活し、1970年代若い世代のデザイナーたちがプレタポルテに参入し、主役が作る人から着る人へと移行した。1980年クロードモンタナ、ヨージヤマモト、コムデギャルソンなど小さな新しい芽が出始め、女性のイメージが、ヨーロッパの肩パットを入れた強いイメージから、ナチュラルな強いイメージに変わっていった。1979年にY'sがパリで出店し、初めてブティックで展示会を行う。1985年には自分のブランドATを持つ。アニエスベーに刺激を受け、カジュアルも取り入れる。しかし、1985年から参加した東京コレクションではモデルが外国人という違和感を感じ、撤退する。1990年パリで初めての展示会とファッションショーを開くが、この時ほかのブランドのデザイナーとの服に対するロイヤリティの違いを感じたと言う。

ファッションは10年毎に大きく変わっていく。10年は人間があるものに対して飽きてくる周期である。1995年からファッション界に新しい動き

が始まった。ラグジュアリーブランドが若手のデザイナーを入れ、ストリートファッションが流行し、その風は、オートクチュールにデニムと言った形で入ってきた。2005年インターネットが根付いてきたころから、情報がすぐに世界に流れ、2010年ファストファッションのZARAやH&Mなどの幕開けとなった。ファッションは、コレクションとストリートファッションの2つのトレンドになった。

ファッションショーにおいては、欧米では春夏と秋冬の2回しかビジネスの機会が無いため、勝負をかけてくる。このシビアさが一生懸命さと呼ばれ、パリ組以外の日本のブランドと大きな差となる。また、ファッションショーの服を見ると、ファッションの世界の変化と消費者の大きな流れといった時代的特徴も見ることが出来る。

服とは、形（デザイン・アイテム）、素材、色、柄、イメージ（テーマ）の5つしかなく、これらを全て満足させれば、満足な服が出来る。イメージとは、時代・時間、地域、感性《有形（見えるもの）・無形（見えないもの）》の3つであるが、日本のファッション教育には、時代と地域が抜けている。知識と技術と、知識を勉強したことをためた上の感性を大切に育てていくべきであると、力説された。

田山氏の歩んで来られた道を語られる中で、時代の大きなターニングポイントや特徴を捉えられた、非常に分かりやすく興味深い講演であった。今後日本のファッション界において、日本人が不足してきたものを確認し、教育現場において、新しい芽を育てていきたいものである。

（記録 原田妙子）

基調講演2 「ファッションビジネスにおけるファッションショーの役割」

元西武百貨店バイヤー 増田 泰子 氏

日本のファッションショーの歩みは百貨店のファッションショーに始まり、ファッションビジネスの変容と共にファッションショーも変化してきた。このたび増田泰子氏には、百貨店バイヤーとしての豊かなご経験から、ビジネスにおけるファッションショーの意義と役割、その過程をお話しいただいた。

1. ファッションショーの変遷

戦後、間もなくから開催された百貨店のファッションショーは、大衆にファッションと共に未来への希望や喜びを供与し、百貨店はファッションを通して皆が集える場所として成長を遂げてきた。19世紀のオートクチュール以来、ビジネス形態と共にファッションショーも形を変えてきた。’60年代プレタポルテの時代はプレスやバイヤーを対象にブランド説明会のような機能を果たし、マスプロの’70～80年代に5大コレクションが始まり、’90年代スーパーモデルの時代、ファッションはメイク・雑貨・舞台・音楽・照明などの総合ビジネスとなった。そして現代、大衆は東京ガールズコレクションに見られるような自分達にとても近い、となりの同級生のようなモデルに手を振りながら、同じ場所に居ることの空気感や統一感を楽しむ。ファッションショーは夢舞台から消費者参加へ、憧れオートクチュールからリアルローズ時代へと変化し、ビジネスも大きな変革を求められている。

2. ファッションショー（コレクション）とは

ファッションショーは、対象顧客によってプレスショーと一般ショーに分けられる。プレスショーは、報道関係者やバイヤーを対象とする、デザイナーやブランドの評価・格付け・企業力などの

情報収集の場、ビジネスチャンスを繋ぐ場である。一方、一般ショーは、アパレルや百貨店が顧客向けに開催するショーで、百貨店では、女性社員を前面に打ち出すことにより企業イメージ向上と社員のモチベーションを図る。また、地域や学校との連携により企業への愛着心が得られ、お客様をモデルに使うことにより仲間が仲間を呼び新しい顧客を得られる。特に、地方におけるファッションショーは、お出かけの場、衣服の新調、化粧雑貨などの販売促進活動となる。しかし、経費と時間の掛るショーの開催は、不況の時代に厳しい。

3. 百貨店のバイヤーにとってのコレクション

婦人服のバイヤーとして、ファッションショーに求めるものと展示会に注目するものは明らかに違いがある。ファッションショーでは、クリエイターのメッセージや感性、時代との整合性やブランドの評価などを総合的に見る。一方、展示会では、商品の完成度やショーで見せたプレゼンテーションが売り場に並んだ時にどの程度製品に生きているか等を確認する。

4. そしてこれから

エコやリサイクルなどの後ろ向きイメージを如何に前向きにするか。日本人は、美しいもの・洗練されたものへの欲求が強い。既成概念にとらわれず、若い感性を生かして毒気（＝強さや挑戦的なエネルギー）を発揮して欲しい。ファッションの毒気・色気は刺激とエネルギーを作り出す。最後に、学校におけるファッションショーで重要なのはテーマ性、各大学の色や強いものを表現しなければ、と手厳しくも適確なご示唆を頂いた。率直なお話を清々しく拝聴した。

（記録 田中早苗）

話題提供 「パリコレの現場から大学教育の現場へ」

和洋女子大学 滝澤 愛 氏

夏期セミナー二日目の話題提供で颯爽とあらわれたパリジェンヌ／a Parisienne 滝澤愛先生のお話しは、私たちをフランスのオートクチュールの世界へと誘うものでした。映画のなかでドレスアップされた生の作品にみとれるなか、その精巧な手業ともいえる制作過程の現場での厳しさも垣間見ることが出来る話術にも魅力を感じる時間でした。とくにファッションショーを開催するまでの多くの企画と制作、そしてデザイナーの苦悩とそれを支えるスタッフの息づかいが感じられるお話でした。滝澤 愛先生のお話しの詳細な内容は、夏期セミナーの資料に写真も多数入れてご案内をいただいていますので、そちらをご覧ください。ここでは、感想も含めて夏期セミナーの資料を補う観点での簡単なご案内を記録とさせていただきます。

はじめに、先生の実際に関わったウンガロのアトリエでのファッションショーへの道のりを、2003年に放送された画像を通してドキュメンタリータッチで現場の様子を説明されました。モデルのオーディションからフィッティングの様子、アクセサリーの選択など、多くの専門家が関わりめまぐるしく展開しながらぎりぎりまでこだわりつつ仕上げられたドレスをはじめ多くの作品が、ショーでは世界中の大勢の人の目に一瞬にさらされ、そして良し悪しを瞬間的とも言える評価にさらされている様子が披露されました。このような熱気あふれるオートクチュールは、色の魔術師といわれるウンガロのアトリエでも湾岸戦争後は注文が少なくなりやめられたとのことでした。世界の経済不況が、ファッションの世界にも大きくかわり、その高度な魔術師達の制作する手業を含め素材の開発などに大きく影響を与えていることが感じられました。高品質の服の提供がなくなり、一般市民である私たちの衣生活での服を鑑賞する

“憧れのドレス（服を総称して）”を楽しむ機会が減ったようでした。

次に、滝澤愛先生がこのような実際のアトリエでの仕事をするまでに学んだ専門学校であるオートクチュール組合立服飾学校での教育の内容が紹介されました。世界中から集まった言葉の違う生徒達に衣の制作技を個人対応で教えられる内容と過程には、目からウロコが落ちた間であったことを述べられました。ドレーピング、フィッティングからある意味布の上でのパターンメイキングから、刺繍やレースの柄の間に立体感をだすためのダーツの組み込みを手作業で処理していく、まさに技の伝達の様子が案内されました。また一方、動きやすさもふまえた生きた人のための服づくりとしてのゆとりの設計は、まさに体形&動きへのフットを組み込んだ服づくりが感じられた説明でした。

以上のパリジェンヌとしての技を日本の大学での被服構成教育で展開するため近年は大和撫子に変身され、その魂？としての思いを大学教育で伝達される様子を、学生達がすばらしい技術を学びドレスを仕上げている現場を通して説明されました。裁断から縫製するための手づくりの台をはじめいろいろな道具や技術を工夫しながら、日本での被服教育のなかに明治以降によく育まれた学校教育での洋服づくりにパリでのオートクチュールといわれる洋服づくりの風を吹き込まれ、奮闘されている様子とその育てようとする意気込みが強く伝わってきました。今度は、ぜひ実際の実技などもご紹介いただければと期待して、先生のご活躍を楽しみにしたいと思います。

(記録 増田智恵)

パネルディスカッション 「大学発のファッションショーの意義」

カリキュラムとしての

ファッションショーを試みて

東京家政大学 雲田直子氏

「カリキュラムとしてのファッションショーを試みて」というテーマで講演をいただいた。短期大学部服飾美術科では学園祭で学生有志が取り組む手作りのファッションショーを、2002年度より授業科目として位置づけ、現在は2年生科目「ファッションショー企画・制作」（通年・1コマ・2単位）、「ファッションショープレゼンテーション」（通年・コマなし・2単位）として開講されている。授業の目的は「今まで学んだ知識と技術を基に、作品制作とそのプレゼンテーションという総合的な共同作業を通して、一人では成し得ない創造過程を学び、協力し合うことの意義（大切さ）を体感する」。つまり、学生がそれぞれの役割分担を担い、ショーの成功を目指して意見を出し合い、創意工夫を重ね、本番当日へ向けて時間軸を追いながら目標に向けて進んでいくというまさにプロジェクト型の取り組みである。授業の流れとして、最初に各係のスタッフ配置、衣装制作のユニット（グループ）の結成、実行委員会の設立を行って、本格的に始動する。続いてユニットごとのデザイン決定、全体のデザイン総見、ショーの構成の決定、作品の制作実習。さらに、モデルのウォーキングレッスン、各ユニットのヘアメイク案、演出案の作成・練習、舞台設営、衣装総見・完成度のチェック、小物制作、ショー本番。その後も反省会、DVDを見て内容を振り返り、レポートの作成・発表まで、実に綿密に網羅された内容である。

「自ら考えながら動くことを積み重ね、それが大きな流れとなり、ショーという具体的な形に完成する過程を実体験できることは、社会に出てから大いに役立っています。」という雲田先生のお言葉が大変に印象的であった。（記録 片瀬眞由美）

衣服を動的に表現して

～ファッションショー～

相模女子大学短期大学部 田中百子氏

「衣服を動的に表現して～ファッションショー～」というテーマで講演をいただいた。生活造形専攻では、そもそも2年間の学習の成果として演習科目で制作した作品を発表する「造形展」が開かれていたが、作品をマネキンに着せて発表する方法から、人がまとうことで造形性を高め、「衣服の動的な表現」を行うことのできるファッションショーに発展したという経緯を持つ。そして現在では「卒業制作展」として引き継がれ、30回もの開催を重ねている。この取り組みの特色は、卒業制作展としての学内発表にとどまらず、大学の地域貢献活動として発展している点である。まず1992年に「グリーンウェーブ相模原」に招かれ、1994年からは相模大野フェスティバル「万灯まつり」のイベントの中の一つとして組み込まれ、現在まで16回もの回を重ねている。さらに1999年からは、学生の自主的な学習・活動を評価し、単位認定をする科目として造形研修「現代デザイン研修」（見学研修、作品発表、コンペの応募、実務研修）を組み入れることで成果を上げていることである。学生の専門性を生かした制作活動とショーの運営を通して、地域との連携、地域貢献活動を経験することができ、それをさらに成果として評価されることは、学習の上での強い動機づけとなるだろう。ともすれば単なる1回限りの発表会で終わってしまいがちなショーだが、ここでは目的の違う3つの発表の場（卒表制作展、大学祭、そして、地元を舞台とした地域のまつり）に合わせる創意工夫を経験できる。また昨今の大学に求められている「地域との連携・貢献」の使命を具体的に果たしている模範的な事例として、ぜひ参考にしたい。（記録 片瀬眞由美）

短期大学におけるファッションショー

ーその教育効果についてー

元東京田中短期大学 小田巻淑子氏

中国紹興市での紹興国際貿易交易会のイベントへの招聘をきっかけに、2004年からカリキュラムの一環としてファッションショーを実施されている東京田中短期大学の事例を伺った。

ファッションショー演習は、前期2コマ15回、後期2コマ8回で、前期にファッションショーの企画・デザイン・製作を行い、後期を着装とデザインのチェックおよびショーの企画運営にあてている。企画・デザイン・製作の内容は以下のようである。

- ① 統括リーダーの選出
- ② 大テーマの決定
- ③ デザイン画の提出
- ④ 小テーマ別のグループの構成
- ⑤ コミュニケーション作りための学外授業の実施
- ⑥ 小テーマの最終決定と衣服製作

ショーの運営は教員や卒業生の協力のもと、学生が主体となり、統括リーダー、副リーダー、モデル、ヘア・メイク、フィッター、舞台担当、広報、タイムキーパー、舞台・会場の設営、ショーのプロデュースなど係を分担している。教育効果として、学生の服飾に対する勉学意欲の向上、在校生と卒業生のつながりの強化、社会との認識を共有しようという意識の芽生えがある。

大学の被服教育としてファッションショーを行う上での課題として、以下の3点の指摘があった。我々が今後とりくむべき問題点と感じた。

1. クリエイティブなアートの創造力の育成に加え、マーケットを意識した創造力の育成。
2. アパレルのグローバル化に対応できる基礎教育の充実（例えばの各国の気候風土や政治経済、体型、素材、造形心理 についての知識の習得）。
3. ファッションビジネスができる程度の語学力の強化。

（記録 土肥麻佐子）

イメージを表現する技術への取り組み

文化女子大学 磯崎明美氏

カリキュラムの一環としてファッションショーを実施している文化女子大学の事例をうかがった。服装学部服装造形学科では、3年次後期の「ファッションプレゼンテーション企画製作（必修選択／2単位）」、「ファッションプレゼンテーション企画製作・実習（集中／選択／4単位）」と4回生前期「ファッションプレゼンテーション（集中／必修／1単位）」がカリキュラムに組み込まれている。3年次後期から6コース約360名の学生全員で企画・製作を始め、4年次4月にショーを実施する。

ショーの実施のプロセスは以下の通りである。

- ①各クラスの企画委員が中心となりショーの統一コンセプト、構成・内容・方向性を決める。
- ②クラスで1シーンを担当し、そのコンセプトやデザイン案をイメージマップ・デザイン画などで提案する。
- ③イメージを具現化するためのアイデアや材料の収集、技術的な試作・検討を行う。
- ④合同討議会を行うことでショー全体を見渡した調整を行う。
- ⑤スタイリング・ヘアメイク等を含めた最終調整をし、効果的なモデル動線・照明音響の検討と全体の確認を行う。

会場・受付・広報活動などショーとその後の作品展示や舞台裏の公開などに関わる活動は係を決めることで、学生一人一人が責任をもって行う。その教育効果は、以下のようである。①情報収集や技術的な挑戦などイメージを具現化する方策を自主的に模索することができるようになる、作業スケジュールを立てる習慣が身に着くなど専門知識の統合に加えて総合的な力がつくこと②他者とかかわりの中で個人の責任感が生まれ、プレゼンテーション能力や社会性が養われる③ショーで手掛けた作品を就職活動に利用できる。

学生の主体的な活動を強調されたが、それをサポートするために先生方大変な御苦労があることが想像された。

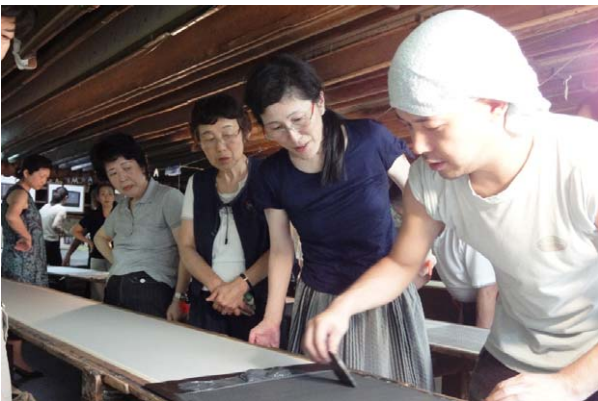
（記録 渡邊敬子）

見学「富田染工藝」「永世文庫」

今年の夏期セミナーは、例年にない酷暑の中開催された。2日目午前までのプログラムを無事終了し、午後、日本女子大学から徒歩20分くらいの西早稲田にある「富田染工藝」を見学した。天気は快晴、参加者40名は色々な話題を語らいながら目的地に到着した。

日本三大染色産地は、京都・金沢・東京であり、東京においては神田川界隈に多数の染色屋が集まっていた。「富田染工藝」は、前に神田川が流れ、その川岸には大きく広がった枝の桜の木々が見える場所に位置していた。150年前、京都の染色人（初代）が浅草の馬車道に工房を構えた。しかし、染物をするには良質の水が豊富に必要であり、そのため大正3年に現在の西早稲田へ工房を移転し、この地で創業、そして東京染小紋の老舗として活動されている。まず小紋と江戸更紗を中心に、染色技法や作品、粋でモダンな感覚を折り込んだ工房についての話を伺い、ビデオを見た。その後、工房内の染色工程を見学し、袱紗の染色体験をした。工房内では、熟練工から若い人まで幅広い年齢層の人が働いていた。多くの人に染色や着物に親しんでもらい、伝統を守り、そしてすばらしい技術が次世代へと継承されることを望まずにはいられなかった。

（記録 十一玲子）



「永青文庫」は、東京都文京区目白台の江戸時代から戦後にかけて所在した広大な細川家の屋敷跡の一隅にある。昭和25年、細川家に伝来する文化財の散逸を防ぎ、保管展示するために設立された。現在の建物は旧細川侯爵家の家政所（事務所）として昭和初期に建設されたものである。

暑い中、長い坂を登ると、鬱蒼とした木が生い茂る永青文庫に到着した。この時期は、夏季展示で「神と仏 日本の祈りのかたち」が展示されていた。永青文庫は神道や仏教に関連した文書・美術品を数多く所蔵しており、細川幽斎奥書の「出雲国風土記」「豊後国風土記」をはじめ、神道については「祇園祭礼図巻」「藤崎宮祭礼絵巻」など祭礼の絵巻や「日本書紀」「神皇正統記」などの資料・古書、賀茂真淵・本居宣長・平田篤胤などの著書、仏教については中国の仏像、白隠・仙厓・一絲など禅僧の書画、平櫛田中や沢田政広などの仏教彫刻が展示されていた。外界の暑さも都会の喧騒も忘れて絵巻物の中の装束を観察したり、常設の洋書の数々や調度品なども興味深く見学することができた。

（記録 渡邊敬子）



夏期セミナーに参加して

大妻女子大学 短期大学部
與儀 由香里

平成 22 年度は、「被服構成学的視点からの情報発信—ファッションショーが果たす役割—」を総合テーマにデザイナー、ファッションビジネス、教育等様々の立場の方から貴重な講演をお聞きすることができました。

田山氏は「ファッションショーにおけるプレゼンテーションのあり方とその意味」というテーマで講演なされ、数年前からインターネットが普及し、コレクションの情報が素早く伝達されることにより、値段が安く速くモードを楽しめる、ファストファッションが恩恵を受けているとおっしゃっていました。また、日本のファッション教育についても言及しておられ、時代や地域をテーマとして与えることの重要性についても考えさせられました。

増田氏の「ファッションビジネスにおけるファッションショーの役割」をテーマとしたご講演からは、バイヤーがコレクションを観る際、商品を科学する「プロ」と、ファッションにこだわりを持つ「生活者」の二つの視点を持っており、ショーは服を着て動いて見せ、五感を刺激する重要な場であることを知りました。

滝沢愛氏の話提供からはパリコレクションの現場で培った経験や技術を学生に還元することを考え、熱心に指導されている様子に感動しました。

パネルディスカッションでは、大学発のファッションショーの意義というテーマで各先生方からお話を伺うことができました。学生たちがユニットを組み、企画からショーの実現まで試行錯誤しながら組み立てていくことで人格形成にも大きな影響を与えていることを知り、とても興味深く感じました。

今回の夏期セミナーに参加し、多くのことを学ばせていただき、大変有意義な経験となりました。

名古屋女子大学短期大学部
大澤香奈子

今年の夏期セミナーのテーマの中には、ファッションショーが果たす役割とありました。そしてプログラムにあった、ファッションディレクター田山淳朗氏の基調講演にまず惹かれました。学生の頃から、そして今でもクロゼットにATのジャケットがありますので、少々不純な動機と思いつつも、とても楽しみにセミナーに参加いたしました。

田山氏は実際に体験して、そして経験して感じたことを、モードの移り行きとユーモアとともに話されました。もう一つの基調講演、元西武百貨店バイヤーの増田氏の講演では、商品が消費者の手に渡るまでを伺うことができました。この2つの基調講演の中で、感性の重要性、そして感性の数値化や定量化が求められるといったことは非常に印象的です。

2 日目のパネルディスカッションでも、各パネリストの先生方から興味深いお話を伺いました。パリ、オートクチュールの現場での経験をお持ちの滝澤先生のお話からは、貴重な映像と共に先生の熱いファッションへの想いが伝わってまいりました。また、他に紹介された、ファッションショーをカリキュラムに取り込んだ試みでは、時間を重ねて学ぶ大切さ、継続的なプログラムであることは大きなエネルギーを要するが成果もあるのではと、服飾教育の一端に従事する一人として考えるところが多くありました。

構成学部の夏期セミナー参加は数年ぶりでしたが、本セミナーに参加して、装うということについて色々な角度から考える機会を持つことができました。また、懇親会等でたくさんの先生方とおはなしさせていただき、教育現場についての意見交換もすることができました。とても充実した2日間となりました。

平成 21 年度研究例会

「大学と中・高校の被服製作学習の発展に向けて」

日時：平成 22 年 3 月 26 日（金）

場所：和洋女子大学 西館 2-2, 2-3

千葉県市川市国府台 2-3-1

プログラム

13:00～14:20

話題提供

「中・高校・大学の被服製作実習は今、
どのように行われているのか―教材を中心に―」

1. 全国調査の結果から

鳴海多恵子（東京学芸大学）

2. 高校の実践例

赤澤 愛（都立青梅総合高校）

3. 教材販売の状況から

伊勢宜央（（株）アイセック）

4. 大学の被服製作実習における問題点

柴田優子（和洋女子大学）

14:30～16:30

シンポジウム

「被服製作学習の充実に向けて、
中・高校・大学がどのように連携できるか」

コーディネータ 鳴海多恵子（東京学芸大学）

1. 新学習指導要領における

被服製作学習のめざすもの

鈴木明子（広島大学）

2. 大学における被服製作学習のめざすもの

石垣理子（昭和女子大学）

3. 中・高校の現場から構成学会に期待するもの

阿部睦子（東京学芸大学附属竹早中学校）

4. 製作教材の開発と普及にむけての提案

布施谷節子（和洋女子大学）

大学の現場から―学生の学びから感じること―

福島大学 千葉 桂子

2005 年度の改組により、教員免許状の取得は学生の希望によるものとなった。その結果、被服製作実習関連の授業においても家庭科教員免許状取得希望者に加えて、ファッションに興味があるとか今まで服を作ったことがないので作ってみたいという多様な希望をもつ学生が混在するようになった。それにより、知識・技術のスタートと到達のレベルをどこに設定したらよいかが一層深い悩みとなっている。対応策の一つとして初回の授業では、高校までの製作品、基本的な道具や技法名称の認知や自分でできるか等を調査しているが、中にはチャコペーパーによる印付けを一度もしたことがない学生も出現するようになった。授業ではベルト付きスカートの製作を行っている。それは高校までの製作でゴムを入れる方法は体験済みと想定し、大学ではそれより高度な作品を完成させる知識・技術を身につけることが必要だと考えて来たからである。しかし今年度の学生をみると、ゴムを入れることとベルトを付けることは単にそれぞれ別のことであり、レベルアップという意図は伝わっていないことを確信した。このことから、私自身の意識を問い直す必要を感じている。大学での学びには専門を深めるという意義と同時に、その後の人生においていろいろな人々やものと出会って自立し楽しく生活するために準備を進めるといった目的もあるのではないだろうか。そのためにはやはり知識・技術の積み上げを追求するとともに、確かに社会とつながっていて有用なものであるということ、事実としても理念としても教示する必要があると感じている。具体的な妙案は無いが、それらが最先端ファッションの基礎になっていることや実は古代からの染織文化にも共通していることなど、文化的背景を深く捉え直して意識化させるための学びについて模索していきたいと考えている。

高等学校の被服製作学習の現状

ー全国調査の結果からー

東京学芸大学 鳴海多恵子

学生の被服製作に関する知識・技能が低下してきた、という印象は、私が学生指導に携わるようになって以来、ずっと感じてきていることである。しかし、特にこの数年は際だっている。その原因は、平成14年（中学校）および15年（高等学校）から実施された学習指導要領の影響であることは否めないだろう。すなわち被服製作が、中学校では選択履修の内容とされ、さらに高等学校「家庭基礎」では扱わないこととなった。従って、中学校でも高等学校でも被服製作を経験しないで大学に進学する学生が少なくない時代となったわけである。かつて、家庭科の男女共修が実現したとき（平成4年告示学習指導要領）、男女共通に扱える製作教材として、それまで裏付きスカートやベストの製作をしていた高等学校でもショートパンツやヨットパーカーが扱われるようになった。現行の学習指導要領に基づく「家庭総合」の教科書でもそれらの製作教材を引き続き掲載しているが、私の学生達に製作経験を問うと、被服を製作した経験はほとんどなく、エプロンやエコバックなどをあげるものが多い。高等学校の学習内容が、本来の目標に達していない実態があることが伺える。

このような実態について、小・中・高校の家庭科の教員を中心とする研究団体「全国家庭科教育協会（ZKK）」では、平成20年に、今後の授業改善への資料とすることを目的として、被服製作学習の教材を中心とした調査を行っている。

高等学校家庭科教員の回答は279名であったが、そのうち「家庭基礎」の担当者は61%あり、その75%が被服製作実習を実施していた。本来被服製作を扱

＜表1 家庭基礎＞

作品	エプロン	基礎縫い	小物類	バッグ類	コースター	パンツ類	編み物
回答数	29	23	13	5	3	3	7

その他の作品：座布団、タペストリー、お手玉、布絵本、布カルタ、組紐、ミサンガ、介護用円座、はっぴ、スカート

＜表2 家庭総合＞

作品	エプロン	基礎縫い	バッグ類	パンツ類	コースター
回答数	33	27	15	11	4

その他の作品：ぬいぐるみ、帽子、アクリルたわし、衤付きベスト

わない「家庭基礎」の多くが被服製作実習を取り上げていることは大変興味深い。教材の具体例を「家庭総合」とともに表1、2に紹介する。

表に示されるように、被服製作と称してはいるが、パンツ類以外は小・中学校と変わらない小物などの簡易なものである。単位数の違う2つの科目で取り上げている製作教材にほとんど差がないことは、現代の被服製作学習の困難な背景が伺い知れる。

しかし、家庭科教員が「被服製作実習で生徒に身につけさせたい力」も科目による差異はなく、「ミシン縫いや手縫いの習得」「生活実践力」「創造の喜び・完成時の達成感の体験」「生活文化を継承する力」などである。家庭科教員は被服製作学習の意義と重要性を認識し、授業時間の少なさ、知識・技術の個人差、縫製機器の管理などに関わる多くの課題を抱えながらも、いろいろな工夫をしながら被服製作学習に取り組んでいる。平成24年から実施される中学校の学習指導要領では「布を用いたものの製作」が必修内容として位置づけられており、時間的・技術的に負担のない製作教材の開発が喫緊の課題となっている。また、中学校で製作を経験してきた高校生が発展的に取り組める製作教材の開発も不可欠である。本部会が教育現場に貢献すべき重要な時宜である。

（引用 平成20年度全国家庭科教育協会研究調査報告書）

「第11回全国中学生創造ものづくり教育フェア」報告

和洋女子大学 布施谷節子

第11回は、平成23年1月22日・23日に、東京都江東区の新木場タワーで開催された。被服製作部門は「豊かな生活を創るアイデアバック」コンクールだった。これは昨年からの課題であり、新指導要領に照らして、衣服作りに限らず生活を豊かにするという視点を大切にしたものづくりである。コンクールの方法は昨年と同様で、全国ブロック大会で優秀な成績を修め、選り抜かれた14名が、新木場タワーに集まり、午前・午後の合計3時間半の中で、予選の作品と同じものを、事前のレポートに従って製作するというものである。

製作の条件は、使用する布の合計面積が110cm×50～100cmで、布は複数種類使用してもよい。古着を使用してもよいが、古着のポケットやファスナー、ボタンなどの部分をそのまま使ってはいけない。裏地なしで、立体構成とする。バックの口は塞がるようにする。デザインの工夫はバック本体とする。入れるものの目的に合わせて、耐強の縫い目及び縫い代の始末をする。ポケットは必ず本体につける。ポケット口は三つ折にして手でまつ。スナップは必ずつける。型紙は事前に作成しておく。出来上がった後実際に入れるものを使いながら1分程度のプレゼンテーションを行う、などであった。

3時間半の競技中、私を含む4人の審査員は、生徒たちの間を回り、縫製技術をはじめ安全への配慮や作業効率や課題箇所の遂行の様子を細かにチェックした。また、競技に先立ってレポートを審査し、実際の進行状況と照らし合わせも行った。

競技中は、付き添いの教師や保護者やミシン会社のサポートの人たちに見守られながら、大変な緊張感とミシンの音だけが響くような静寂の中にあり、審査する私たちも、立ち通しの疲労を口にするのはばかられ

るような状態だった。ほとんどの生徒は時間内に出来上がった。2,3人は僅かな処理を残したが、概ね出来上がったといえる。多くの評価基準に沿って集計し、順位が付けられた。一位の生徒は3年間連続でこのフェアに出場している3年生であった。その他にも受賞した生徒の作品は技術水準が高いのはもちろんのこと、使う人への思いをこめて、創意工夫がされていた。多くのバックは数種類の使い方ができるというものだった。アイデアにも脱帽だが、ミシン操作の卓越した技には驚かされた。コンクールに備えて十分な練習を積んだであろうが、中学生がここまでできるかと、日頃の大学生の指導に手を焼いている私にとっては感心することばかりであった。被服構成学部会賞は千葉市立大椎中学の西川春菜さんに決定した。賞状と洋裁道具や布などをセットにした賞品を贈呈した。この作品は担任の美術の先生がいつも大きな荷物を抱えて校内を移動することから、効率よく道具を運べるバックを考えたとのことだった。

コンクール以外に、生徒が家庭科の授業の内外で製作した作品が全国から集められ、新木場タワーに展示されていた。部会ではそのうちの2名に奨励賞として賞状を贈呈した。これらはワンピースドレスの製作で、大学生も舌をまくような出来栄であった。

被服製作学習の状況が厳しい中、頑張っている生徒さんが沢山いること、それを支え、指導して下さる熱心な教師がいることに、まだまだ捨てたものではないなと思い、このような生徒が行く行くは大学で被服構成を学んでくれたらよいなと思わずにはいられなかった。3月の研究例会では、コンクールの14作品を拝借して展示し、参加した部会員に見ていただくことができた。

第11回全国中学生創造ものづくり教育フェア生活を豊かにするアイデアバックコンテスト



会場風景



各賞品の展示



被服構成学会賞受賞作品と生徒のプレゼンテーション



プレゼンテーションを終えて 出場者全員の記念撮影

関連学会短信

<2010 年 ITAA 年次大会>

東京家政大学 (非)・小田巻 淑子

2010 年 ITAA 年次大会は、10 月 26 日から 10 月 30 日まで、カナダのモントリオール市街中心の Hyatt Regency Montreal ホテルで開催されました。1997 年カナダのベンで開催されて以来の国外大会ということでしたが、例年より参加者は少なかったようです。しかし、逆に知った方が少なかったため、これまで顔見知りであっても話したことのなかった先生方とワークショップなどをとおして交流を深めるなど、有意義な時間をもつことができました。今回の参加目的は、「Design Exhibition」での入選作品展示のほか、ワークショップ「Haute Couture Fashion Story Hands-on Draping with the Mme. Gres Technique」に参加することでした。人気が高く、早期事前申し込みで 30 名限定のワークショップでしたが、大会参加者 400 名の中で参加できたことは、幸運でした。題目にある Mme. Gres は、布の彫刻師として名高く、私も憧れていたデザイナーでした。特に印象的なのは、作品を決して他人任せにしないでアトリエの一室にこもり、一人で制作したという逸話です。今回は、Paris American Academy 協賛のもと、Mme. Gres の数少ない助手として 24 年間支えた Mme. Pico によって、Mme. Gres のドレスの実物を手に作品解説と技術指導がおこなわれました。事前にドレスピン等を準備せよとのメールが入りましたが、デモンストレーションで終わるのだろうと考えていました。しかし、制作実習では、丁寧な個人指導も行われ、手際の良い手さばきと落ち着いた語りに導かれ、いつのまにか作品が完成していました。小作品でしたが、Mme. Gres のドレープの美しさの基本技術や構成が理解できたことは、大きな収穫でした。この経験から、Mme. Gres が決して他人任せにしないで制作した理由が納得できました。細かくとったソフトブリーツを、デザインやモチーフにあわせて、一本ずつピンで留めドレープを制作していくわけですから、豊

かな感性と確かな技術がなければ表現できないわけです。今回、パリの某有名デザイナーの要請も拒否した Mme. Pico が指導に応じてくれたのは、教育者と学生には惜しみなく Mme. Gres の技術を伝えたいという Mme. Pico の強い意志からだ、Paris American Academy 校長の M. Carman から伺いました。私は、思わず、恩師、田中千代先生の作品と教育、そしてジバンシーのアトリエで活躍した中沢乃智子先輩（フランス政府公認最高技術者）の技術指導を思い出しました。今回、確かなもの良いものを大事にする気持ちに国境はないことを実感しました。教育の現場だからこそ、本物の伝統を大切にする必要性を強く感じます。ITAA では、近年、こうしたテクニカルワークショップを積極的に取り入れているようです。

会場となった Lasell College は、仏語圏の被服系大学としては一番大きいそうで、活気が溢れていました。見学する時間の余裕はなかったのですが、昼食から戻る際、迷子となり、偶然、あちこちの教室を目にする事になりました。授業は少人数制で行われ、設備等も充実しておりガラス張りの明るい教室からは活発な雰囲気伝わってきました。

年次大会総会においても、国籍を越えた若い教員や大学院生の活躍がめざましく、彼らの発案による、情報交換や研究の迅速な交流を目的とした組織設立報告などが印象に残りました。2011 年は、11 月 3 日～6 日まで、フィラデルフィアのシェラトンホテルで開催されます。



＜日本人間工学会第 51 回大会＞

金城学院大学 片瀬眞由美

第51回大会は、平成22年6月19日(土)、20日(日)に北海道大学で開催された。今回の大会は、学会の法人化後、初の大会と言うことと、昨年には節目の50回大会を数えたことなどから、メインシンポジウムとして「人間工学—その伝統と未来—」が開催された。人間工学会誕生の背景と意義についてお話下さる予定であった大島正光先生が急逝されたため、大久保堯夫先生が代わりに大島先生のご研究の足跡について話されるなど、学会の歴史をベテラン～中堅～若手の研究者へと伝承し、今後への可能性を考え合うという内容であった。

今回の大会から始めた新しい試みとして「ハイブリッド発表」がある。会員相互の研究成果をより緊密に共有できるようにとの狙いから考案されたものである。形式は、口頭発表は壇上で3分間、講演集を用いて(パワーポイントは使用しない)研究の説明を行い、その後すぐに各自のポスターの前に移動し、聴衆との質疑応答を行う。大勢の聴衆が座ってそのセッションの発表を聞くことができ、それから各ポスターの前でゆっくり質疑応答ができる。研究発表180件のうち、ハイブリッド発表は6割以上の111件に上った。筆者もハイブリッド発表を経験した。3分という壇上での発表時間は余りに短く感じて物足りなかったが、ポスター前での質疑応答では基本的な事項は知っていた上で話を始められるので、より深く話すことができたように思う。また、聞く側としては、ポスターの前で聞き取りにくく見えにくい状態で聞くよりも大変快適で集中できた。

その他、特別講演1、大会シンポジウム1、学会企画シンポジウム3、学会企画パネルディスカッション1、公募ワークショップ1、公募シンポジウム7と、非常に盛りだくさんの内容で、聞きたいシンポジウムが重複し、どこに聞きに行くか迷って仕方ないという贅沢な悩みにさいなまれる2日間であった。先進的な取り組みをし続ける日本人間工学会の今後の展開が、とても楽しみである。

＜日本衣服学会＞

埼玉大学 川端 博子

衣服学会の第62回(平成22年度)年次大会は、平成22年10月16・17日と歌山大学地域連携・生涯学習センターで開催された。発表は20演題で、被服教育、福祉と衣料、着装意識、被服の快適性、材料、色彩に関する内容であった。人、もの、そして社会に関わる内容、理工学的アプローチから国際交流に至るまで研究手法も実にさまざま、複合領域としての被服学の多様性を改めて実感する。日ごろ自らは触れないよう研究も聞くことができて、刺激を受けたり、知識不足を反省させられたりする。フロアからの質問も活発で、領域の垣根を越えた参加者が集う学会のよき特徴が印象づけられた。

特別講演は、和歌山県立大学の森岡郁晴先生の「暑い夏を迎えた年こそ、冬の生活に注意を！」と題するものであった。気温と死亡率の統計データと身体の温熱生理の基礎をふまえ、暑さ寒さへの対策について住居・衣服の工夫を絡めて、分かりやすく説明頂いた。

懇親会では、毎年のことながら元気な大先輩方から刺激をもらう。今年度入会された先生方から年次大会に満足したという感想を頂き、幹事の一人として嬉しく感じている。

また、12月11日10:00～16:10には「衣服が発信するメッセージ」と題して22年度科研費研究成果公開講座が奈良女子大学講堂にて開催された。服飾史と服飾文化に関する内容で、年次大会とは異なる趣向で、一般参加者・学生や会員の方々から好評であったと聞いている。

被服関連の学会は、6月あたりに集中して開催されるため、混み合ってつらいものがある。その点、衣服学会は閑シーズン(10月)に行われ、行楽シーズンでもあり、夏休みの成果を報告する上でもタイミングがよい。23年度は金城学院大学の予定で開催準備をすすめている。どうぞ、構成学部会の方々にも発表いただき、年次大会を盛り上げて頂ければ幸いである。

会 務 報 告

1. 平成 22 年度会務報告

1) 事業報告

① 総 会

日時：平成 22 年 5 月 29 日（土）

場所：広島大学 K114 室

② 夏期セミナー

「被服構成学的視点からの情報発信-ファッション
ショーが果たす役割」

日時：平成 22 年 8 月 23 日（月）・24 日（火）

場所：日本女子大学新泉山館国際交流センター
大会議室

③ 全国中学生創造ものづくり教育フェアへの後援

日時：平成 23 年 1 月 22 日（土）23 日（日）

場所：新木場タワー

⑤ 研究例会

「大学と中・高校の被服製作学習の発展に向けて」

Part II - 新学習指導要領の実施にむけて -

日時：平成 23 年 3 月 26 日（土）

場所：和洋女子大学

⑥ 部会誌 32 号発行 平成 23 年 3 月 31 日（木）

⑦ ホームページの維持管理

2) 庶務報告

① 第 1 回運営委員会

日時：平成 22 年 5 月 29 日（土）

場所：広島大学 K114 室

(1) 平成 21 年度事業報告

1. 夏期セミナー

2. 研究例会

(2) 平成 21 年度会計報告

(3) 平成 21 年度会計監査報告

(4) 平成 21 年度夏期セミナー会計報告

(5) 平成 21 年度夏期セミナー会計監査報告

(6) 平成 22 年度予算（案）

(7) 平成 22 年度事業計画

1. 夏期セミナーについて

2. 研究例会について

3. 部会誌 32 号の発行について

(8) 被服構成学部会規約の改正

(9) 平成 22.23 年度の部会企画について

(10) もの作り本（仮称）の刊行について

② 第 2 回運営委員会

日時：平成 22 年 8 月 23 日（月）

場所：日本女子大学 小会議室

報告事項

(1) 夏期セミナーのスケジュール及び役割分担

(2) 各係からの進捗状況

(3) その他

審議事項

(1) 22 年度の研究例会について

(2) 23 年度の夏期セミナーについて

(3) その他

3) 会計報告（次頁以降参照）

2. 平成 23 年度事業計画（案）

① 総会（社）日本家政学会

平成 23 年度年次大会時

② 夏期セミナー 平成 23 年 8 月

③ 全国中学生創造ものづくり教育フェアへの後援

平成 24 年 1 月

④ 研究例会 平成 24 年 3 月

⑤ 部会誌 33 号の発行

⑥ ホームページの維持管理

⑦ もの作り本（仮称）刊行他

平成21年度 被服構成学部会夏期セミナー 収支報告書

◆ 夏期セミナー

収入の部

(円)

費 目	予 算	決 算	備 考
参加費	400,000	276,000	会員 10,000円×27名 学生 2,000円×3名
雑収入		15	受取利子(通常貯金)
合 計	400,000	276,015	

支出の部

費 目	予 算	決 算	備 考
会場費	100,000	78,600	
講師謝礼	78,000	55,555	徴収税 5,555円を含む
要旨集代	60,000	50,000	
印刷費	30,000	1,484	
雑費	10,000	13,005	
会議費	20,000	9,660	
通信・輸送費	20,000	16,950	
交通費	10,000	0	
庶務費	10,000	6,890	
見学手土産代	6,000	6,300	
人件費	20,000	20,000	
予備費	36,000	0	
合 計	400,000	258,444	

差引残高＝ ￥17,571

◆ 懇親会

収入の部

(円)

費 目	予 算	決 算	備 考
懇親会費(宿泊込み)	720,000	424,600	25名分(前泊 3名分を含む)
合 計	720,000	424,600	

支出の部

費 目	予 算	決 算	備 考
料理、宿泊料金	680,000	402,900	
飲物代	40,000	13,600	
合 計	720,000	416,500	

差引残高＝ ￥8,100

◆ 見学会

収入の部

(円)

費 目	予 算	決 算	備 考
見学会費	90,000	87,000	3,000円×29名
合 計	90,000	87,000	

支出の部

費 目	予 算	決 算	備 考
バス代	60,000	43,500	
昼食代	30,000	43,500	
合 計	90,000	87,000	

差引残高＝ ￥0

差引残高＝ ￥25,671

上記事項 に相違ございません

平成 21 年 12 月 15 日

会計 鈴木明子、可部野和子

会計監査

堀尾 茂子
小山 京子

平成21年度 収支決算報告(H21. 4. 1～H22. 3. 31)

(1)部会会計

(円)

費 目	予 算	決 算	備 考
収入			
部会費徴収	325,000	377,500	151人分
その他の収入	0	26,720	利子10月1049、夏期セミナー余剰金25,671
基金より	170,000	0	
前年度繰越金	0	0	
計	495,000	404,220	
支出			
総会運営費	100,000	66,097	講師所得税2,777円を含む
部会誌発行費	110,000	110,040	部会誌印刷代
人件費	0	0	
会議費	10,000	14,700	
庶務費	10,000	2,138	
通信費	40,000	28,160	部会誌発送等
交通費	50,000	17,320	夏期セミナー、部会誌発送業務交通費
事業費	155,000	160,325	中学生ものづくりフェア協賛金、賞品代、Hp更新・維持管理料、研究例会
税金分	10,000	0	
予備費	10,000	0	
基金へ	0	5,440	
計	495,000	404,220	

差引残高

0

(2)基金

	3,011,454
(内訳)	
前年度繰越金	3,003,135
利子(定期預金)	2,879
21年度差引残高	5,440

私ども監事は、被服構成学部会の会計監査を行った結果、上記事項に相違ないことを認めます。

平成22年4月1日

監事

富田 明美

監事

高部 啓子



(1) 部会会計

(円)

部会の費目		22年度予算	21年度予算	増減 (21－22年度)
収 入	部会費徴収	325,000	325,000	0
	その他の収入	0	0	0
	基金より	170,000	170,000	0
	前年度繰越金	0	0	0
	計	495,000	495,000	0
支 出	総会運営費	0	100,000	-100,000
	部会誌発行費	110,000	110,000	0
	会議費	20,000	10,000	10,000
	庶務費	10,000	10,000	0
	通信費	40,000	40,000	0
	交通費	30,000	50,000	-20,000
	事業費	240,000	155,000	85,000
		35,000		
	税金分	0	10,000	-10,000
	予備費	10,000	10,000	0
	基金へ		0	0
	計	495,000	495,000	0

(2) 基金

	現在高	支出	残高
活動基金	2,982,879	170,000	2,812,879

お 知 ら せ

1. 会費納入について

平成 23 年度の被服構成学部会費 2500 円は、5 月中に下記郵便払込口座にご送金くださるよう、お願い申し上げます。また、過年度未納の方には別紙にてお知らせいたしましたので、併せてご送金ください。

郵便払い込み口座 00160-2-322300 日本家政学会被服構成学部会

なお、会費に関するお問い合わせは、下記にお願い致します。

〒151-8523 東京都渋谷区代々木3-2-2-1

文化女子大学 服装造形学研究室 磯崎 明美 宛

TEL&FAX 03-3299-2352

E-mail isozaki@bunka.ac.jp

2. 入退会、住所変更等について

お届け、お問合せは下記までお願いいたします。

〒102-8357 東京都千代田区三番町12番地

大妻女子大学 短期大学部 家政科 土肥 麻佐子 宛

TEL 03-5275-6036

E-mail m-dohi@otsuma.ac.jp

※ 入会申込書および変更届、退会届の書式は最終ページをご参照下さい。

※なお、退会届につきましては(社)日本家政学会の退会手続きとは別処理になっていますので、部会への手続きも併せてしていただきますようお願いいたします。

3. E-mail アドレスについて

E-mail アドレスの登録にご協力いただきありがとうございます。アドレスをお持ちの方でまだ登録いただいていない方は、平成 23 年度会費納入の際に振り込み用紙の通信欄にご記入いただければ幸いです。またアドレスの変更がある場合には、なるべくすみやかにお知らせくださいますようお願い申し上げます。

4. 平成 22 年度新入会員

伊藤 海織(福岡女子大学) 岩澤 未奈(東京都立町田工業高等学校)

神山 久美(東京家政学院大学) 柴田 優子(和洋女子大学) 滝澤 愛(和洋女子大学)

中村 邦子(日本女子大学) 古田 貴美子(神戸女子短期大学) 細長 喜久代(大阪成蹊短期大学)

丸田 直美(文化ファッション大学院大学) 宮野 洋子(東北女子短期大学)

ご 案 内

平成 23 年度 被服構成学部会 総会並びに夏期セミナー(案)

「衣心地の質の向上を目指して-着心地と見心地のトータル化を探りませんか-」

期日：2011 年 8 月 30 日 (火), 31 日 (水)

会場：三重大学メディアホール 〒514-8507 三重県津市栗真町屋町 1577

プログラム(案)

	8 月 30 日 (火)		8 月 31 日 (水)
12:30～	受付開始	8:30～	受付開始
13:00～13:10	開会の辞	9:00～10:00	基調講演 3 「アパレルメーカーにおける 3D データ 解析について (仮題)」 オンワード樫山 山本 幸生 氏
13:10～14:40	基調講演 1 「3 次元体形の研究から衣服設計 への歩みと試み (仮題)」 大阪大学大学院 黒川 隆夫 氏	10:00～11:00	基調講演 4 「韓国の計測の実態について (仮題)」 東ソウル大学 崔 景美 氏
14:40～15:00	休憩	11:00～11:10	休憩
15:00～16:30	基調講演 2 「伊勢神宮における衣・食・住 神さまの衣服はどんなの? (仮 題)」 矢野 憲一 氏	11:10～11:50	パネルディスカッション パネリスト オンワード樫山 山本 幸生 氏 東ソウル大学 崔 景美 氏
		11:50～12:00	案内
		12:00～13:00	休憩
		13:00～15:00	ワークショップ・パネル展示 ・3 次元計測体験 ・企業情報 ・教育・研究情報
17:00～19:00	懇親会	15:00～15:10	閉会の辞

※ ワークショップ・パネル展示では、産学合同で 3 次元アパレルの計測から着想シミュレーション・CAD 関係の企業から部会員の教育・研究の情報交換までを行い、コミュニケーションをはかりたいと考えています。ご参加をご予定ください。

※ 参加費は 5000 円を予定しています。

※ 部会員には追って詳細をご案内いたします。

連絡先 〒514-8507 三重県津市栗真町屋町 1577 三重大学教育学部 増田智恵

E-mail tomoem@edu.mie-u.ac.jp TEL&FAX 059-231-9303

社団法人日本家政学会被服構成学部会 規約

- 第1条（名 称） 本会は、社団法人日本家政学会被服構成学部会と称する。
- 第2条（目 的） 本会は、会員相互の研究に関する連絡及び協力をはかり、被服構成学に関する教育・研究を促進することを目的とする。
- 第3条（事 業） 本会は、前述の目的を達成するため次の事業を行う。
- 1 総会を開催する。
 - 2 被服構成学に関する研究・討議・講演などを行う。
 - 3 部会誌を発行する。
 - 4 その他の必要な事業を行う。
- 第4条（会 員） 本会の会員は、次のとおりとする。
- 1 正会員 被服構成学及びこれに関係する分野を研究する社団法人日本家政学会会員で、本部会の目的に賛同して入会した個人。
 - 2 名誉会員 元部会長、または、特に部会の発展に寄与した会員で、70歳を越えた場合に、運営委員会の議決をもって推薦された者。
- 第5条（入 会） 本会に入会を希望する者は、所定の入会申込書を部会長に提出し、運営委員会の承認を得るものとする。
- 第6条（退 会） 会員が退会しようとするときは、その旨を部会長に届け出るものとする。
この場合、既納の会費は返却しない。
- 第7条（役 員） 本会に次の役員をおく。
- 部会長 1名
副部会長 2名
運営委員 若干名
監 事 2名
- 第8条（役員の選任） 役員の選任は、次のとおりとする。
- 1 部会長及び監事は、運営委員会がこれを推薦して、総会で選任し、部会長の選任および解任は、社団法人日本家政学会理事会の承認を受けるものとする。
 - 2 副部会長及び運営委員は、部会長がこれを推薦し、会員に報告する。
- 第9条（役員の任期） 1 役員の任期は2年とし、再任を妨げない。
2 役員の再任については、申し合わせを別に定める。
- 第10条（役員の職務） 役員の職務は次のとおりとする。
- 1 部会長は部会を代表して会務を統轄し、事業計画および予算、事業報告および決算を毎事業年度、社団法人日本家政学会理事会に報告する。

- 2 副部長は部長を補佐し、必要な場合には部長の職務を代行する。
- 3 運営委員会は本会の業務を運営する。
- 4 監事は本会の会計監査を行う。

第 11 条（役員の解任） 役員が次の各号の一に該当するときは、解任を運営委員会で動議し、総会で決議して、社団法人日本家政学会理事会の承認を受けるものとする。

- 1 心身の故障のため職務の執行に堪えないと認められるとき。
- 2 職務上の義務の違反、その他役員たるにふさわしくない行為があると認められたとき。

第 12 条（会 計） 本会の会計は次のとおりとする。

- 1 経費は正会員の会費、その他をもってまかなう。
- 2 会計年度は、毎年 4 月 1 日に始まり、翌年 3 月末日に終了する。

以上

附 則

- 1 この会則の改正は、総会の議決によって行い、社団法人日本家政学会理事会の承認を受けるものとする。
- 2 施行に関する内規は別に定めることができる。
- 3 この会則の施行は昭和 54 年 10 月 8 日からとする。
- 4 この会則の一部改正の施行は昭和 59 年 8 月 3 日からとする。
- 5 この会則の一部改正の施行は昭和 63 年 8 月 1 日からとする。
- 6 社団法人日本家政学会部会規定に基づき、平成 15 年 8 月 27 日から被服構成学部会会則を廃止し社団法人日本家政学会被服構成学部会規約とする。
- 7 この規約の施行は平成 15 年 8 月 27 日からとする。
- 8 社団法人日本家政学会部会規定に基づき、平成 18 年 8 月 22 日から被服構成学部会規約を廃止し社団法人日本家政学会被服構成学部会会則とする。
- 9 この会則の施行は平成 18 年 8 月 22 日からとする。
- 10 社団法人日本家政学会部会運営規程および部会運営規程細則に基づき、平成 22 年 5 月 29 日から被服構成学部会会則を廃止し、社団法人日本家政学会被服構成学部会規約とする。
- 11 この会則の一部改正の施行は平成 22 年 5 月 29 日からとする。

社団法人日本家政学会被服構成学部会 申し合わせ

- 1 運営委員会 運営委員会は、部会長、副部会長、運営委員、監事で構成する。
- 2 役員の任期 (1) 規約第9条に従って部会長の任期は2年とし、再任を妨げない。ただし、継続して3期はつとめられない。
(2) 運営委員の任期はできるだけ2期4年間とし、その交代は半数ずつ交互に行うことが望ましい。期間をあけての再任は、これを妨げない。
- 3 運営委員の選任 運営委員の選任にあたっては、できるだけ部会員が在住する広範な地区から選ぶように配慮する。
- 4 事務局幹事及び編集幹事
(1) 必要に応じて事務局幹事及び編集幹事をおくことができる。
(2) 事務局幹事及び編集幹事は若干名とし、部会長がこれを指名する。
(3) 事務局幹事及び編集幹事は役員会に陪席することができるが、議決権は持たない。
- 5 事務局 事務局は、原則として部会長のもとにおく。

附則

この申し合わせは、社団法人日本家政学会被服構成学部会規約に基づくもので、改正にあたっては、運営委員会の議を経て、総会で承認する。

- 1 この申し合わせは、平成15年8月27日から施行する。
- 2 この会則の一部改正の施行は、平成18年3月31日からとする。

平成 22・23 年度役員

部 会 長	布施谷節子	和洋女子大学
副部会長	岡部 和代	京都女子大学短期大学部
	鳴海多恵子	東京学芸大学
運営委員		
(庶務)	土肥麻佐子	大妻女子大学短期大学部
	原田 妙子	名古屋女子大学短期大学部
	田中 早苗	東京家政大学
(会計)	磯崎 明美	文化女子大学
	渡部 旬子	文化女子大学
	十一 玲子	神戸女子大学
(企画)	増田 智恵	三重大学
	小田巻淑子	元 東京田中短期大学
		東京家政大学 (非)
	森下あおい	滋賀県立大学
(広報)	大塚美智子	日本女子大学
	植竹 桃子	東京家政学院大学
(編集)	渡邊 敬子	京都女子大学短期大学部
	片瀬眞由美	金城学院大学
(監事)	大村 知子	元 静岡大学
	猪又美栄子	昭和女子大学

事務局 〒272-8533 千葉県市川市国府台 2-3-1

和洋女子大学 被服構成学研究室

TEL 047-371-2196 (ダイヤルイン)

FAX 047-371-1336 (代表)

E-mail : fuseya@wayo.ac.jp

(社)日本家政学会 被服構成学部会入会申込書および変更届, 退会届

入会 変更 退会 (いずれかを○で囲む)	申込年月日 年 月 日		受付年月日 年 月 日	
	ローマ字			
	氏名	氏	名	
	西暦 19 年生		性別	男・女 (どちらかを○で囲む)
家政学会所属支部				
自宅住所	〒 (-)			
	TEL		FAX	
	E-mail			
勤務先・職名 および所在地	勤務先		職名	
	〒 (-)			
	TEL		FAX	
	E-mail			
専門分野	<研究分野> <担当授業科目>			
最終学歴				
学位				
部会誌送付先	自宅・勤務先 (どちらかを○で囲む)			

太線枠内は必ず記入してください。細線枠内は差支えない範囲でお書きください。

退会の場合は、今後、連絡する必要がある場合に備えて、連絡がつく自宅か勤務先の情報をご記入ください。

お届けは「お知らせ」ページの宛先まで、添付メールまたは郵送にてご提出下さい。

部会費は「お知らせ」ページの口座にご送金ください。

* 個人情報保護には十分に注意をいたします。

なお、書式を被服構成学部会ホームページからダウンロードしてお使いいただくこともできます。

URL: <http://h-kohsei.com>

編集後記

部会誌第32号をお届けいたします。原稿執筆などご協力をいただいた皆様に感謝申し上げます。執筆の依頼の遅れた先生方をはじめ部会長の布施谷先生にはご迷惑とご心配をおかけしましたが、皆さん温かく協力して下さって本当にありがたかったです。心から御礼を申し上げます。さて、今年の部会誌には修士論文や博士論文の要旨の応募がなくて、とても残念でした。若い研究者が育つことを切に願っています。また、広く部会員の先生方の研究や教育の成果も紹介できるような特集を組んで、活気ある部会誌にしたいです。みなさまのご協力をお願いいたします。（渡邊）

初めて編集担当のお役をいただきました。これまで記録をさせていただく機会は何度かあったのですが、依頼される側とする側の大きな違いと、編集担当の大変さを思い知りました。先生方がお忙しい合間を縫ってご協力いただきましたおかげで、無事に32号をお届けすることができました。ご執筆やご協力に深く感謝し、御礼申し上げます。また、33号の発行に向けまして現在企画を考えております。「こんなことを載せて欲しい」など、ご要望やご意見をどしどしお寄せ下さい、お待ちしております。（片瀬）

平成23年3月31日・発行

発行：(社) 日本家政学会 被服構成学部会

印刷：北斗プリント

TEL：075-791-6125